

「コンセプト」ではなく、「型」で物事を進める日本人

日本語は主語があいまいなままでも文章が成立します。

日本人は、どうやって物事を進めてきたのかというと、様々な体験の中から共通する「型」を見出し、その「型」を磨くことで行ってきたと思います。

日本には、ありとあらゆるところに「型」があります。

柔道、剣道などの武道。茶道、華道、俳句、和歌などの芸術。能、狂言、歌舞伎から落語などの芸能、無数のものづくりや建築などの工芸に至るまで、私たち日本人は多くの創造性を「型」に。

「守破離」という言葉があります。

「守」は師の教えを守り、疑いを挟むことなく、ひたすら技の基本を身に付ける段階

「破」は基本の教えを守りつつも自分の個性や能力を発揮して、技を発展させる段階。

「離」は教えや型に囚われることなく、そこから離れて自由に自分の世界を創造する段階。

日本文化の多くのものは、この「型」を身に付け「守破離」のステップを踏んでいけば良いように組み立てられています。誰でも出来るように先人たちが普遍的なノウハウを示してくれています。

「型」通りにやっていると、「考えずに自動的に動ける」ということです。

身に付いた「型」が、状況を頭が判断する前に、動きを無意識のうちに指示してくれるのです。

しかし、今、世界を見ていると「誰がルールをつくるか」の戦いです。

新しいルールをつくって自分たちに有利な世界をつくっていくことに全力を尽くしています。

例えば、スポーツでのルール変更など、その最たるものでしょう。

スキー競技、ジャンプ、フィギュアスケートなど、日本がオリンピックで強かった種目がルール変更により勝てなくなったことはご存知だと思います。

ルールが変わること、全体の流れがどこに向かっているのかに対して欧米の人々はとても敏感に反応します。どこかで世界はアツという間に変わる場所だと認識しているようです。

これは価値観も言葉もまったく違う世界中のさまざまな場所へ、15世紀の大航海時代から出て行って、苦勞してつかみ取った彼らの歴史的実感なのでしょう。

当然、手痛い失敗も数多く経験しているはずですが、だから目指す方向がダメだと分かった時の、変わり身の早さには、いつも驚かされます。

「プラットフォーム戦略」「デファクトスタンダード戦略」とは、世界のルールと仕組みを、自分基準のものにしようとする意志に他なりません。

私たち日本人は、江戸時代のように265年間も平和であった歴史から、「世界がこのまま続く」ことを前提に「型」をつくり、極めるクセがあるようです。

そのせいなのか、変化する世界に合わせて自らを変えること、物事を組み立てることが苦手です。

2つの方法論の成果のあげ方を簡単な方程式にすると

日本：前提となるルール×「型」の研鑽×コンセプト（事後）＝成果

欧米：コンセプト（事前）×有利なルール化×「戦略」の推進＝成果

——コンセプトではなく、型で物事を進める日本人（例：武道、守破離）

日本方式は、勝てる「型」の発見と洗練に全力を注ぎます。

ルールにどう沿っていくかという発想で取り組んで行きます。

そして事後的にコンセプトを見出しながら、成果を手にしします。

欧米方式は、まず戦略的なコンセプトをつくったら、それに基づき自分たちが有利になるようなルールづくりに力を注ぎます。

ルールが決まったと見るや、戦略の推進に全力を尽くします。

前提条件やルールが変わると、それまで一生懸命学び、身に付けた「型」は無力化されてしまいます。

時にまったく役に立たなくなります。

「型」の最大の欠点はここにあります。

どんなに剣の名人になろうと、機関銃が出現した瞬間に、それは無力化されてしまうのです。

<経営のヒント>

コンセプトはある日、突然変わる！

1970年代のオーディオブーム。

アナログのレコードからカセットテープへ、そしてCD、現在ではダウンロード。

戦艦大和、零式戦闘機も同じ構造ですね。

日本が最高レベルに到達した時、欧米では戦うルールを自分に有利になるように変える努力をします。

まさに、政治力です。

日本には最高レベルの下士官がいるが、司令官のレベルは最低だと言われます。

戦術や戦闘では強いが、戦略では敵わない！

なぜ、そうなって行ったのか？

それは明治維新以来に、哲学や価値観を学ぶことをしなかったからではないでしょうか？

戦略とは、大局観察から俯瞰した意思決定（選択と集中）です。

意思決定するには、確固たる価値観・哲学が必要となります。

共に価値観を学び切磋琢磨しませんか？